

## 介護ニーズ最前線

## 団塊の世代を知る

阪本 節郎

人生100年時代 未来ビジョン研究所 所長

新連載

団塊世代の「うた」が  
介護施設を大きく変える

今後利用者として「団塊の世代」が激増していくなか、新たな高齢者像を知り、介護ニーズを理解するため、団塊の世代の実情や志向、団塊の世代がもたらす介護現場への影響について解説します。



さかもと・せつお ● 1975年早稲田大学商学部卒。快博報堂入社。プロモーション企画実務、研究開発に従事した後、企業のソーシャルマーケティング開発を推進。2000年にエルダービジネス推進室、11年に新しい大人文化研究所を設立。さらに、19年に独立し当研究所を創設。現在、所長。著書「50歳を超えたらもう年をとらない46の法則」（講談社＋α新書）『シニアマーケティングはなぜうまくいかないのか？ 新しい大人消費が日本を動かす』（日経新聞出版社、韓国版、台湾版他）

## 団塊の世代が利用者に

これまで団塊の世代は介護施設にとっては、利用者家族として接することが多かったのではないかと思います。その団塊の世代も一番上が72歳、そしてこの令和元年中には、真正団塊がすべて70代となります。まさに団塊70代となることで、団塊の世代自身が利用者になる 때가近づいています。

団塊の世代は、終戦直後の1947（昭和22）年から49（昭和24）年の3年間に生まれた人たちでこれを「真正団塊世代」と言い、その数は約700万人に上ります。

さらに51（昭和26）年までの5年間に生まれた人たちを「広義の団塊世代」と呼び、約1000万人います。直近の新生児が94万人で年間100万人弱です。したがって3年で300万人弱、5年で500万人弱にしかならず、いかに人口ボリュームが大きいかかわかります。まさに「数の力」です。団塊の世代によってこれまで見慣れた介護施設の風景が一変する可能性があります。それをこれから毎号皆さんと一緒に考えていききたいと思います。

団塊の世代がわが国の  
若者文化を生んだ

そもそも団塊の世代は若者のときに社会全体を大きく変えました。わが国で最初の本格的な若者文化を生み出し、その若者文化が今に続いていると言えます。わかりやすくいえば、「男の長髪」「ジーンズ」「ミニスカート」といういまでは当たり前の若者ファッションが、団塊世代以前には影もカタチもなかったのです。これらはビートルズやローリング・ストーンズ、ボブ・ディラン、ファッションモデルのツイッギーなどとともに60年代後半のわが国に入ってきて、当時若者だった団塊の世代が自分たちのファッションにすることで、一気に若者ファッションになったものです。

団塊の世代によって  
音楽も一変した

いま触れたように実は世代の変化は音楽とともにあった、と言えます。それまで、わが国の音楽シーンは歌謡曲と演歌が圧倒的でしたが、それがわずか2〜3年で当時の若者を中心に、ロック・ポップス・フォークソングの大きな波がやって来たのです。その最初とも言えるのがエレキブームをつくったベンチャーズです。現在、全国に70代の団塊の世代を中心にしたベンチャーズのコピーバンドがあります。北海道・函館ベンチャーズ、山形ベンチャーズ、兵庫・丹





写真1 ふくろうの家新宿落合第二文化祭の様子



写真2 1970年前後のジャケット写真

後ベンチャーズ、熊本・水前寺ベンチャーズなどです。ベンチャーズは現在も毎年夏に来日し、北海道から沖縄まで全国津々浦々で公演を行っています。この後にビートルズが来日し、グループサウンズブームが起こりまし

た。エレキバンドは男の子たちでしたが、コンサートで熱く応援したのは当時の女子高生たちでした。

### 介護施設の「うた」が大きく変わる

介護施設で「うたわれるうた」は団塊の世代の目に見える最も大きな変化となるでしょう。介護保険制度が施行された2000年の頃によくうたわれたのは「どんぐりころころ」をはじめとする童謡でした。同時期には若い職員が高齢者を叱るということがあり、人生の先輩に尊敬の念を持ちましよう、と呼びかけられ、「さん」付けが一般的となりました。

介護施設で「どんぐりころころ」はまさに定番でした。その後、利用者の世代が大きく変わり、それまでの戦前世代から、戦中派、戦後世代となり、「うた」も変わりました。現在、多くの施設でうたわれているのは文部省唱歌だと言えます。「ふるさと」や「荒城の月」「隅田川」などです。よく日本人の心のふるさととは演歌だと言われますが、実は、それよりも全国ど

の地域のどの人たちにとっても心のふるさとなのはこの唱歌なのです。そのなかで、まだ一部に「どんぐりころころ」も残っているのですが、すでに、現在の利用者からは「私はどんぐりころころなんか歌わないわよ」という声が聞かれます。

これが団塊の世代になるともっと大きく変わるわけです。前述のような世代ですから、概ねどの施設にもギターが置いてあるようになるだろう、ということです。ちなみに写真1は、地域に開かれたデイサービスを目指している、東京「ふくろうの家新宿落合第二」の文化祭の様相です。ここでは来賓がギターを弾いていますが、これからは食堂やコミュニティスペースなどで利用者の誰かがギターの弾き語りをしているのが日常的な風景になりそうです。うたわれる「うた」も必然的に変わります。森山良子「この広い野原いっぱい」「今日の日はさようなら」や加山雄三「旅人よ」「君といつまでも」、歌謡曲としては「高校三年生」などが一般的といえます。現在はその上のプレ団塊世代が利用者となりつつある状況だといえ、その

意味では吉永小百合「寒い朝」や坂本九「上を向いて歩こう」などがその橋渡しになるでしょう。「どんぐりころころ」は流石にどのような施設でも地雷になりかねない。要はバカにするんじゃないよ、という反応になりかねない、ということ。一方で、いままでのように、介護職員がすべて汗を流して「うた」の指導をしなければならなかったのが、うまく話を持って行けば、ギターの弾き語りができる利用者を中心に自分たちで歌ってくれるということになります。それは、若者のときに、多くの職場や学校でみられた光景で、職員としてはうまくその場をつくってあげてそれがスムーズにいくようにサポートすればいいという可能性もあります。それは介護施設としても「どんぐりころころ」の介護施設とは大きく様変わりすることを意味します。また若い介護職員も一緒に歌って楽しめるポップスやニューミュージックに変わって行くことも意味します。一緒にギターの弾き語りもありそうです。いま以上に利用者も職員も楽しい施設になる可能性があるといえるでしょう。